

『昭和的』のデザイン 1

『とんだとんだ』のデザイン 8

思い出のクリフォード 10

日日読書 16

続・ぼくの映画館は家から5分 11

メモランダム・本のデザイン 12

N'S COLUMN 13

カメラと歩く 14

MY KID'S DIARY 15

魚の環世界 16

関川夏央
絵・南仲坊

昭和的



昭和的

関川夏央
絵・南仲坊



ISBN 978-4-394-98016-2
C0095 ¥2200E

定価：本体2200円+税

春陽堂書店



1920095022000

「昭和的センス」
ささやかな抵抗

春陽堂書店

時は過ぎた。

「昭和的センス」
から逃れられない
時代遅れの著者の
ささやかな抵抗。
辛口にして
味わい深い
珠玉のエッセイ集

春陽堂書店

定価 2420円 (本体2200円+税)

山田風太郎の長寿祝い
ヤクザ映画と三島由紀夫
昭和的汽車旅・電車旅
「義理人情」という思想
「天国と地獄」の撮影
誰でも老いる、誰でもボケる
「倍速」で見てもいいですか？
ヤザキマリと隣席の乗客
「いとしのエリー」を歌う彼
山田風太郎と黒澤明
「突然炎の〜とく」と
洋画の邦題
「秋刀魚の味」に
映されたプロ野球
渥美風天の俳句
〈目次より〉

3 文字とも違うデザインにしたいというご依頼
でした。形は違ってても共有するなにかが感じ
られる文字にしようと考えて、たてよこの比率や
重心、太さなどを3文字でおおよそ揃えています。
仕上げとして骨格のような細い線をかさねて、異
なるスタイルの印象が強く出すぎないようにしま
した。それぞれ形は違ってても、おたがいに干渉せ
ず、静かに響きあっているような文字と感じても
らえたらうれしいです。ご依頼くださった春陽堂
書店の清水真穂実さん、ブックデザイナーの赤波
江春奈さん、日下潤一さん、そして著者の関川夏
央さんに心より感謝申し上げます。

タイトルレタリング ヨコカク



関川夏央
絵・南仲坊

春陽堂書店

昭和的

関川夏央
絵・南仲坊

昭和的

関川夏央
絵・南仲坊

春陽堂書店

春陽堂書店



一斉入場

ゆえに、かえってそのウラに大きな虚偽を隠しているのではないか——としか受けとれなかった。しかし、いまわたしたちの前に、すばらしい光景が展開されている。肌で分ける壁もない。主義、思想の別もない。みんなが、肩を組み、いちように笑い、同じく手を振りつけて……

実は閉会式の劇的展開には、意外な原因があった。開会式と同じくアルファベット順に各国が入場し、行進する約束だったのだが、開始を待つ間にイスラエルとイラクの選手団の間にいさかいが生じた。

それが全体に波及する気配を感じた係員が、順番を無視した「一斉入場」に緊急誘導したのである。

マラソンのアベベ、柔道のヘーシンク、女子体操のチャスラフスカ、世界の広さ、強さ、美しさを日本人に実感させ、そして偶然とはいえ、閉会式では世界の希望の記憶を日本人の心に刻んだ一九六四年の第一次東京五輪であった。それに引き換え第二次東京五輪は、三十七歳で退社してフリーとなった本田雄春は、糖尿病をはじめ多病で苦しむ晩年を送り、二〇〇四年、七十一歳で亡くなった。病気のうち、肝臓がんは「死血」取材の際に感染したC型肝炎から発症したのである。

上 一斉入場

〈右頁〉

上右 一章扉／上左 目次

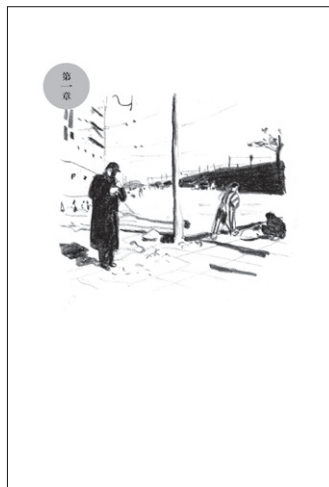
下右 二章扉／下左 大瀧詠一の『楽しい夜更し』

本文

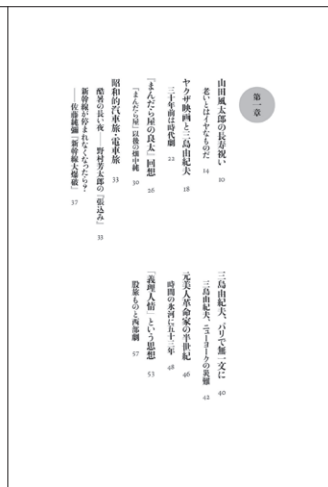
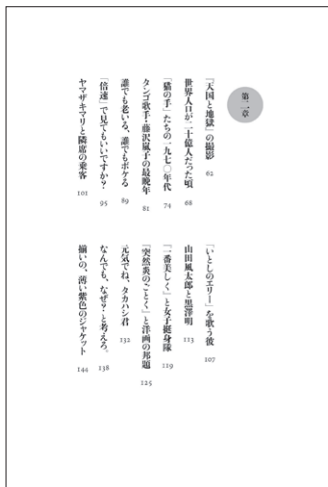
「オリジナリ」の連載の時から、関川さんとのタッグはたのしみでした。「昭和」のイメージというか「白黒写真」は、想像以上に自分自身の「記憶像」だったので、昔のニュース写真や、新聞や雑誌写真を、模写することが、すごくたのしみだったのです。単行本にするにあたって、絵をタテ位置用に描き直したり、連載時に気に入ってなかった絵を描き直したり、もっぱら自己満足のために、バ切を踏み倒して、勝手にしました。すいません、おじいさんは自分勝手ですね、日下さん赤波江さんありがとうございます。

関川さんから、ねぎらいの言葉をいただいた上に「絵・南伸坊」と並記して下さったり、ギャラを印税制にして下さったりとありがたいかぎりです。関川さんありがとう、持つべきものは友達だね。うれしいです。

南伸坊



大瀧詠一の『楽しい夜更し』



イラストレーターの南伸坊と知りあって50年、日下潤一によるBGXのデザインに驚いて以来40幾年かが過ぎた。

この間、何度も私の本の装丁してくれた南伸坊とは、いつか共著の本をつくりたいと念じつづけていたが、このたび『昭和的』という本で実現した。ここに掲げられたイラストレーション群は、南伸坊の「回想の次元」の代表作と思う。また、本のデザインは脊髄反射のごとく日下潤一と、過剰な批評性が増しても抜けない彼が全幅の信頼を置く赤波江春奈に頼み、引き受けてもらった。幸運であった。

一度依頼してしまえば、どちらも私が口をはさむ隙はない。すべてまかせっきりで、いつものように完成品を見て感動することになった。

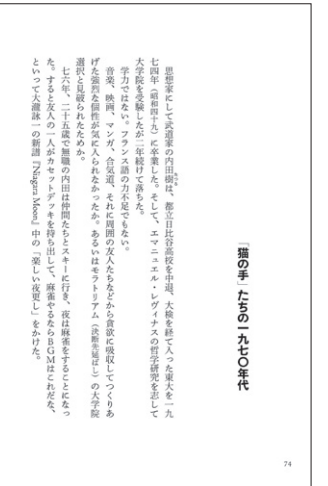
かつて、自分の老いを信じなかった私たちも老いた。時代は移ろった。だが、友の才能と技量を信じ切るやり方は旧に変わらない。それが古びない丁寧な仕事、すなわち「昭和的」な仕事を生み出すのだと思う。

「昭和」の面影

関川夏央



大瀧詠一の『楽しい夜更し』



中川ひろたか なかがひろたか
1954年埼玉県生まれ。シンガーソングライター。1975年「きつめのおいも」(徳・村上隆 著・絵)で絵本作家デビュー。「ないた」(徳・長谷川 著・絵)で日本絵本大賞受賞。ほかに「ピーマン村の絵本たち」シリーズ (徳・村上隆 著・絵)、「ここにちうニ」(徳・村上隆 著・絵)、「おおかみさんいなんじ」(徳・山村隆二 Gakken) などがある。歌に「世界のこともたちが」「にじ」など多数。2023年、全て中川の楽曲によるミュージカル「DADDY」に出演。

長谷川義史 はせがきよしふみ
1961年大阪府生まれ。絵本作家。「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」(BL出版)で絵本作家デビュー。「おたまたまのおかき」(BL出版)で第34回読者投票文化賞受賞。ほかに「うーんたへてるとき」(徳・長谷川 著・絵)で第13回日本絵本賞・第5回小学館児童文化賞、あめたま「プロンズ」で第24回日本絵本賞銀賞受賞。第2回やなせたかし文化賞。ほかに「いいからいいから」(徳・長谷川 著・絵)、「へい、わてすてきだね」(プロンズ)、「だじやれ日本一」(徳・長谷川 著・絵)などがある。

Gakkenの伝承遊びの絵本



〈下の図〉
右2点 本文見開き
上左 表1・帯
下左 奥付



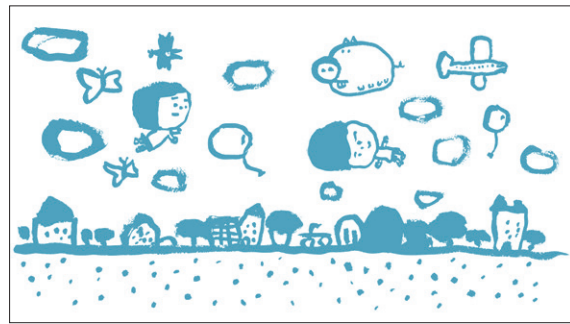
とーんだ とんだ
なーにが とんだ？

ちょうちょに カラス、
ふうせんが とんでくよ

あれれ？
ふたや うしまでも
とんでった……!?



子どもの頃「だるまさんがころんだ」や「かごめかごめ」で遊んだ方も多いと思う。今の子はもう遊ばないんじゃないかと思われるかもしれないが、伝承遊びには根源的な喜びがあるのか、変わらず人気である。そんな伝承遊びを絵本にしたい。元保育士でシンガーソングライターの中川ひろたかさんに相談すると、「とーんだとんだ」はどう？と、ナンセンスな笑いが入ったテキストをくださった。絵は長谷川義史さん。長谷川さんの描く子どもが精一杯泣いて笑って遊んでいる感じがたまらなく好きで、ぜひひとをお願いした。そして数年後、のほほんとして精一杯生きている男の子がやってきた。日下さんと赤波江さんが、長谷川さんの絵を抜群のバランス感覚で軽やかに仕上げてくださった。驚いたことに日下さんと長谷川さんは旧知の仲だという。なんとも不思議なご縁が繋がったのも嬉しい。



絵本『とーんだとんだ』のこと

Gakken 絵本編集者 長峯宣子

見返し



続
ぼくの映画館は家から五分
36

4 月頭の南伸坊さんとの二人展が終わって、次の8月末の個展までに4ヶ月しかない。絵の制作のためにこの連載もお休みさせてもらったが、その間忙しかったのか「オリジナリ」自体が出なかった。9月半ば、実に半年ぶりの下高井戸シネマに行く。禁断症状はなかった。ぼくの人生に映画は必要なのか？しかし映画は誰かの人生を必要としている。ジャ・ジャンクの新作『新世紀ロマンティクス』は二人の男女の人生が丸ごと入っている。監督は2001年から20年以上かけてこの作品を作った。『青の稲妻』、『長江哀歌』、『帰れない二人』など、これまでの自作本編と本編以外の映像、ドキュメンタリー映像、新たな撮り下ろしを編集でつないだ。貧しい時代の中国の映像は今見ると途方もなく絵力が強い。いっしょに観に行った友達二人は、どちらもジャ・ジャンクが好きで、あの映画のあのシーンがあったと語り合っていた。同じ俳優を使い続けるから出来ることである。若かった主演女優のチャオ・タオが映画の中で実際におばさんになる。土が剥き出しだった国はいびつに大繁栄しコロナ禍にある。ほとんど台詞を喋らないチャオ・タオだが、本物のシワが十分に語っている。同じ頃、終盤を迎えた朝ドラ「あんぱん」では二十代の俳優たちが老年を演じていた。まるで高校生演劇だ。

いの・たかゆき 1971年、三重県生まれ。イラストレーター。第44回講談社出版文化賞、第53回高橋五山賞。著書に『となりの一休さん』、『いい絵だな』（南伸坊さんとの共著）がある。最新刊は『増補改訂版 画家の肖像』。

森英二郎 思い出のクリフォード②③

40 年近く前、ぼくは東京の西小山の古い木造のアパートにひとりで住んでいた。東京でやっていけるかどうか、とりあえず上京したのである。部屋にはテレビもステレオもなかったので友人が小さなラジカセを貸してくれた。ある日渋谷のWAVEでジョニー・ウィンターのカセットテープを買いました。なんでジョニー・ウィンターなのか、多分元氣が出るからやと思います。別の日に有楽町駅の構内のワゴンで安いテープを売っていたのでホール&オーツのアポロ・シアター・ライブを買った。ずっとこの2本のテープを聴いていた。そのうちホール&オーツのテープはぶよよんと伸びて聴けなくなっていました。半年が経ち、僕の心もぶよよんと伸びて、大阪に帰ることにしました。今回その40年前のジョニー・ウィンターのテープを出してきてデッキに入れたら、なんと！ちゃんと音が鳴りました。

もり・えいじろう 1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれた うみべのまちへ』など。



ジョニー・ウィンター
Johnny Winter
1944-2014

日日読書 大西良貴

37

London Books
616-8366 京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

川 上弘美は二十代の頃よく読んだ。『センセイの鞆』がフェイバリットだが短編も好きだ。本書は、人と、人ならざる生き物との交情を描いた短編集。久々に読み返したが、世界観、空気がハマっていて、内田百閒や藤枝静男を彷彿させるところもあり、いかにも川上ワールドだなあと。今読んでも面白いが、当時のようにのめり込む感じではない。読書にもタイミングがあることを思わせる。

当時、川上弘美の諸作を夢中で読んだのは、文学への憧れが強かったからだろう。若さとは、自分の自然性への逆らいだと思ふ。自分の性向、あるがままの自分を否定し、未だ見ぬ大きな価値を求める。向上心とも言えるし、背伸びとも言える。マンガ少年だった自分が、文学という未だよく知らないモノに憧憬を抱き、がむしゃらに読む。十代、二十代の頃の読書にはそんな力みがあった。

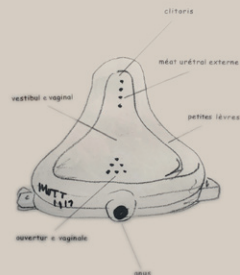
ふと、川上弘美が、今の自分と同じ五十歳頃に書いた小説を読んでみたくなった。

おおにし・よしとか 1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店 London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。



川上弘美『龍宮』
文春文庫／2005年

いつみきと
てかこひし
かるらむ



る恐る送った。
会場を訪れた南さんは、伊野君と話しながら長い時間作品を見てくれたばかりか、伊野君を飲みに誘った。絵は驚きとユーモア、要するに「おもしろさ」が命だと考える南さんは伊野君の絵が好きになった。そして、打てば響くような伊野君との会話をたのしんだのである。

関川夏央

二回り違いのイラストレーター 二人②

南伸坊 × 伊野孝行
ぼくらの好きな画家

2025年3月31日(月)～4月12日(土)
東京青山・スペースユイ

2025年春の「南伸坊×伊野孝行」二人展「ぼくらの好きな画家」では、伊野孝行君だけではなく、南伸坊さんもマルセル・デュシャンの「泉」を作品化していたが、その絵にはこんな言葉が添えられていた。

「いつみきと／てかこひし／かるらむ」
アナグラム？ 暗号？

「いづみ」に関係がありそうだが、わからない。

あれはね百人一首、知ってるでしょ？ とデザイナーの目下潤一さんにいわれたが、私は知らなかった。その二十七番、紫式部の曾祖父、中納言兼輔の歌だそう。

上の句「みかの原わきて流るるいづみ川」に、下の句「いつ見きとてか恋しかるらむ」

とつづく。

「みかの原」は瓶原と書き、木津川がひらいた平野。「いづみ川」は木津川のことと、「わきて流るる」は「湧きて」と「分きて」を掛けた、と解説書にあった。南さんのユーモアと教養にはいつも驚かされる。

一九六〇年代には肩まで届く長髪だった南伸坊は、進学でも就職でも、試験にすべて失敗する人だった。「試験技術」に価値を置いていなかったのだろう。芸大受験準備のためにビーナスを石膏デッサンで描くと、ビーナスのエラが張っていたという。

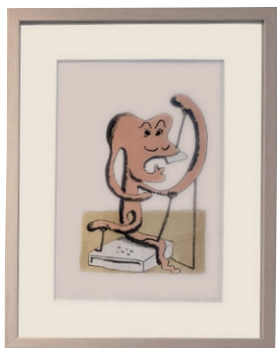
都立工芸高校を出て浪人ののち、無試験の「美学学校」で木村恒久、赤瀬川原平に学んだ。その後、マンガ雑誌「ガロ」を刊行する青林堂に、やはり無試験で入って、仕事熱心な編集長になった。その頃はもう坊主刈りになっていた。

伊野孝行君も、大学を出てから無試験のセツ・モードセミナーで学んだ。もっとも一年目は志望者が多すぎて抽選になり、「浪人」した。主宰者・長沢節に「絵とはデッサンからの解放だ」と教えられ、目からウロコを何枚も落とした。

大学四年時から四十一歳まで、神保町の喫茶店のアルバイトで生活を支えた伊野君は、二〇一四年、表参道のギャラリーで開いた個展の案内を、面識のない大先輩・南さんに恐

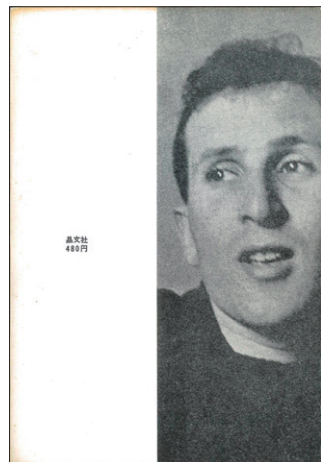
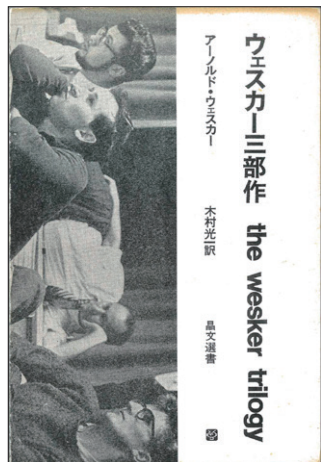
て、人を明るく笑わせながら本質を衝くイラストを描かせた。「いづみ」の下で眠る彼は、大いに誇るべきだろう。

せきかわなつお 1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峽を超えたホームラン』（双葉社／第7回講談社ノンフィクション賞）『坊っちゃん』の時代』（双葉社／谷ロジローと共作・第2回手塚治虫文化賞。最新刊は本誌連載「昭和残照」が元になった『昭和的』（春陽堂書店）。



南さんは伊野君の画集『画家の肖像』に、「おもしろいなあ!」という書き出しの「解説」を寄せ、この画集は「パロディ」ではない、「絵による絵画論」という「あたらしいジャンル」だと書いた。

「泉」で当時の美術界をからかったデュシャンは、百年後、日本の先端的なイラストレーター二人を刺激し



メモランダム・本のデザイン 31

ウェスカー三部作 その3 日下潤一

『平野 甲賀 装幀の本』で、『ウェスカー三部作』を晶文社は「別のデザイナーに頼むはずだった」が、平野さんとその場にいた「デザイン先行型のデザイナーが激しい議論」になり、結局、自分がやることになったと書かれていたが、そのデザイナーというのは私の友人が師事したNさんでした。

「新聞の紙面のような上りにしたい」と、

同書でご本人が言うように、『ウェスカー三部作』の表紙はスミ色の活版刷りで、新聞のように写真の網目が粗い。写真はオリジナルのプリントを一旦製版して目伸ししたのではなく、多分もとが活版刷り写真の複写で、それを拡大して網点が粗れている。これが「スピード感」という無頓着さの演出だ。写真は絶妙な横長のトリミングで、下部（机の部分）を少し袖の折返しのようにまわしている。その雁垂れの袖の内側には、より網目の粗れ気味のウェスカーと演出家のジョン・デクスターの写真が、三方断ち落として入れてある。表紙のタイトルスペースと写真は半々に見えるが、写真の方が少し広い。同じだと白地が膨張して広く見える。裏のウェスカーの顔も、写真と白地の分量は同じく写真のほうが広い。

表紙のタイトルの文字は活字清刷りを詰め貼りして版に起こしている。The Wesker Trilogyの欧文はよく詰めている割に語間がひろいのは長さで文字の大きさのためか。訳者の木村光一の光と一の間を極端な詰め。タイトル文字と著者名の二行の処理、メインのタイトル「ウェスカー」の「ウ」より二行目の「アーノルド」の「ア」が少し下げてあり、地の晶文選書のマークをタイトル一行目の最後の文字「Y」よりやや上に調整している。いずれも小さい方の二行目を一行目と天地びつたり揃えてしまうと、錯視で小さい方が飛び出して見えるから。（つづく）

N'S COLUMN 42 西岡琢也 「ナルホイヤ」の漂白登山

目覚まし

時計の電池を入れ替えてたら、目の前の置き時計の秒針が止まった。電池のストライキか、ネットバンキングのワнтаイムパスカードも三行分、次々電池切れになり、銀行の再発行手続きが面倒で往生した。

次は固定電話が突然繋がらなくなった。受話器を上げてウーンともスンとも言わない。ルーターを換えてもダメで、NTTを呼んで半日がかりで原因が分かり、やっと繋がった。いくつもの、幾重にも張り巡らされたシステムの中にいると実感した。それが一旦綻ぶと、修復に恐ろしく時間と手間がかかる。

生の根幹である衣食住にかかわるほぼすべてに貨幣やテクノロジーが介在し、本人が関与できない仕組みになっている。（略）おまけに仕掛けが複雑すぎて故障したら直すこともできず、また買うしかない。生きるために必要ならゆるものを自分の手で生み出せず、手直しすらできないことによつて、私と命と生活は銀河系にもひとしい

距離によって隔てられている。

『地図なき山 日高山脈49日漂泊行』（新潮社）で角幡唯介は書く。『裸の大地』シリーズで北極を漂白した角幡は、その合間に北海道日高山脈で四度の地図なし登山（三度目から同行者あり）を敢行した、その記録である。

登山のテーマは北極行と同じ、〈脱システム〉だ。「地図を捨て、未来予期フィルターをとりはらわれないと姿をあらわさない」「剥き出しのナマの山」に出会うため、国内で広大な未知の日高山脈を登る。見当をつけた地点までタクシーで行き、そこから川を遡り山へ入る。林道を避け釣り人を避け、ダムや人工物を忌避し、何度か羅に遭遇しながら手探りで登る。目印の地形や山川に名前をつけ、自分の地図を作る。

回を追う毎に釣りの重要性が増す。アメマス（蝦夷岩魚）、ニジマス釣りを、刺身で食べ保存食用に燻製にする。

釣りの成功は山からの祝福である。（略）

山が釣りという殺生行為を認めているというところでもある。それは、私が殺されることを山は求めているということでもあろう。

山では生と死が等価値で循環しており、「アメマスの死は私の生だが、私の死はほかの動物の生である。」と続ける。角幡の著作は詳細な冒険の記録だが、過酷な自然の中の深い思索も必ず叙述する。

「文明やシステムどこから未来予期優先の思考から隔絶することは究極の自由の経験」だが、「その自由は耐えがたいほど重苦しい」と綴る。そして原始の探検家の旅に終わりはなく、「探検は生活と密着した永久に続く無限の行為」と考える。それは地図やシステムを最大限に活用し、ひたすら効率的に地図で定めた目標地点に向かう猪突猛進形の今の探検とは真逆ものだったのだろう。

角幡は北極の民イヌイットの言葉、「ナルホイヤ」（「わからない」「何ともいえない」）に行き着く。狩猟民の彼らは未来予期を避け、足跡や獣道や糞に柔軟に対応して動物の世界に組み込まれていかないと獲物が獲れないとよく知っている。

かくありたいと願う角幡も五十歳目前。体力と経験値から四十三歳が人間の最盛期と言う彼の次の冒険は……まだまだ山をおりるまで。



「万博って、来年もやるの？」と、ふいに聞かれたのは、10月の3連休の最終日。夕方。テレビには、大阪万博最終日の様子が映し出されていた。

「え！もしかして、万博行きたかった？」と質問に質問で返すと、わたしの質問には答えずに、おなじ質問をくり返す。

「万博、来年もやる？」

「ううん、来年はやらないよ。次に日本でやるとしたら……20年後とか30年後くらいかな？　そうか、万博、行きたかったんだね？」

目を逸らしたまま、強い意志を持って頷く。「だって、クラスみんな行ってたし。（たぶんみんなじゃないと思う）ぼくもミヤクミヤクのグッズほしかった。（もしかして、グッズがほしかっただけ？）」

わたしは開催が決まった時から、莫大なお金がかかる万博が、今の日本で開催されることにずっと反対だった。

息子の前で「万博なんて行かない」と口に出しはしなかったけれど、息子は母親が放つ「万博とか、無いわー」という空気を敏感に嗅ぎとって、「万博行ってみたい」の一言を、じっと胸にしまっていたのだろう。万博最終日の夕方になるまで。

実際に行くか行かないかは別として、「万博、行ってみたい？」くらい聞けばよかったのだ。彼の意見を聞くことを、わたしはサボってしまった。

小学2年生の息子には、初めて知る国の名前や、初めて触れる言語がたくさんあっただろうし、彼の敏感な五感をおしみなく刺激しただろう。あの巨大な輪っかの内側には、子どもの好奇心を釘付けにして放さないエネルギーが溢れかえっていたかもしれない。

帰り道で、たのしかった、たのしかったと連呼して、ミヤクミヤクを抱く我が子が目に浮かぶ。

急にちくちくした切ない気持ちに襲われて「連れていってあげてもよかったのかな」と、後悔と反省の波がじんわり胸を濡らしはじめる。だけど、やっぱりわたしは「万博とか、無いわー」派なのだった。

万博が開かれていたこの半年間、息子は毎日笑って、ときどき泣いた。

春の終わり、初めての剣道の試合。一回戦であつという間に負けて静かに泣いた。夏の始めに、何度も挫折して、あきらめかけてい

14 MY KID'S DIARY

万博とか救急車とか

文と絵 赤波江春奈



た自転車に乗れるようになった。夏、一緒に暮らした老猫を吊った。秋になり、チェスを覚えた。万博終了の3日前には、転んで大ケガをした。初めて救急車に乗って、おでこを3針縫った。

5月、呉の港で潜水艦を見た。7月、長崎で泳いで花火をした。8月、近鉄に乗って津と伊勢に行った。丸亀ではうどんを食べて、ロープウェイで松山城に登った。

万博に比べたら、とんでもなく地味で、小さな事件と、明い刺激を寄せ集めた生活。だけどそれは、幕を閉じた万博会場のよう

に、解体されたり、カジノに変身させられたりしない。お金や権力に翻弄されない。いつかまた日本で万博が開かれるとして、その時、日本が今よりまともな国になっているとしたら、今度は息子が連れていってくれるかな。2025年の「行けなかった万博」のことを、はたして彼は覚えていだろうか。

残 暑厳しい午後6時半、週刊誌に掲載された差別的なコラムに抗議する人々が矢来町の歩道に並んでいた。出版社の窓の中では、多くの社員が黙々と自分の仕事をしている。会社は責任を明確にせず、この問題が忘れ去られるのを待っているのだろうか。

筒口直弘 カメラと歩く 9
2025年9月1日

つつぐち・なおひろ
1971年生まれ。「芸術新潮」カメラマン。版元に勤めている自分にとってこの夏はしんどい時間だった。

Life with Chairs 椅子と人生というタイトルは、私ひがしかわちようが北海道・東川町を訪れたときに町の交流施設「せんとびゅあ」で開かれていた織田コレクションの展示会名に由来します。

織田憲嗣先生に「展示に並べる椅子などはご自分で選ばれるのですか？」とかがうと、「これまで育ててきた若い人たちに任せています。展示会のテーマからすべて、東川町の若手スタッフたちが考えてくれています」とのこと。ご自分の手を離れた織田コレクションを広く公開する場所としてデザインミュージアムをつくる計画が進行中で、彼らの活躍の場はこれから広がってゆくようです。

最近、スウェーデンでは公共テレビ局SVTによる新番組「Nordisk design-en kärlekshistoria」の放送が始まりました。1920年代から現在にいたる北欧モダンデザインについての全5回番組で、kärlekshistoriaはスウェーデン語でラブストーリーを指します。各回にひとりずつ登場する世界的なコレクターが語る興味深いエピソードは、まさにそれぞれの「愛の物語」にほかなりません。

第2回には椅子コレクターとして織田先生が紹介され、ご自宅の様子も見ることができます。予告で「椅子は腰掛けるものですが、今では私の人生の上に椅子が腰掛けています」とおっしゃった言葉に、それはまさに椅子に（腰掛けながら）賭けた人生 Life with Chairs だと、どきりとしました。そしてこのタイトルは、東川町の若手スタッフたちから先生への最大の賛辞だったと改めて思いました。デザインミュージアムの開館が今から待ち遠しいです。



フロアスタンド (Kaare Klint) とロッキングチェア J16 (Hans J. Wegner) セんとびゅあにて

魚の環世界 37

魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク(岡澤慶秀)

ウンベルト Umwelt Textiles & Objects
604-0962 京都市中京区夷川通御幸町
西入達磨町588-1

うおずみ・やすこ 1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

前号をお届けに不動前・フラヌール書店へ。本を眺めるのがたのしい書店。前から読みたかった漫画『隙間』を買った。作者の高妍さんは、1996年台湾生まれ。1巻で、台湾の二二八事件のことが描かれる。主人公の楊洋は自分の無知を恥じるが、それを読むわたしも自分の無知を知る。台湾や沖縄のことに、闘ってきた人々や歴史のことを、知らなすぎると分かる。今は2巻目を読んでいる途中。一気に読んでしまわず、時間をかけて全4巻を読んでいくつもり。「オリジナル」は今号で40号に。今年は発行が滞りがちだったが、いつも隔々まで読んでくださる方々、感想を伝えてくださる方々、ありがとうございます。(赤波江)

ある漫画家が、ネットの画像から無断で絵を描いて問題になったとか、無知で迂闊。以前、雑誌の表紙でベテランのイラストレーターに、家のまわりで気に入った風景をテーマに頼んだら、近所ではなくとても手軽に描けないような高さから見た絵を描いてきた。ネットで検索するとすぐに元の写真が見つかった。自分で写真を撮ればいいのに、安直なことをして大丈夫かなと思ったことがある。昔、大好きなブッシュピンススタジオのイラストレーターのジェイムズ・マクラン (James McMullan) の作品集で、スタジオでモデルを使って素材になる写真を撮影、それをもとに絵に描くのを知り感心した。91歳でご健在。(日下)

今月のあとがき

40 オリジナリ

2025年10月15日発行 〈ロゴデザイン〉ヨコカク 〈編集・デザイン〉赤波江春奈・日下潤一 〈印刷・製本〉グラフィック
〈発行〉ビーグラフィックス ©B GRAPHIX 2025, Printed in Japan 【無断転載禁止】 お問い合わせ = akabae@bgx.jp

◆Web = bgraphix.com ◆Twitter & Instagram = @bgx_book_design ◆日下潤一のプロブログ = www.bgx.jp/blog/
「オリジナル」はBGXが毎月発行するフリーペーパー／100部発行

◆ロンドンブックス (京都・嵐山) ウンベルト (京都・夷川) フラヌール書店 (東京・不動前) に10部ずつ、
古瀬戸珈琲店 (東京・神保町) に5部、置いています

E.Mori

